

# 朝鮮半島における石器から鉄器への転換

## Transition from stone to iron in Korean peninsula

中村 大介\*

Nakamura Daisuke

### 1. 序論

『三国志』魏書烏丸鮮卑東夷伝に記されているように、朝鮮半島では早くから鉄を産出し、原三国時代(紀元前2世紀後葉～紀元後3世紀)には、日本列島と比べて、豊かかつ多様な鉄器が保有されていた。また、遼東地域から南下してきた粘土帯土器文化の後半段階(初期鉄器時代)に鉄器が舶載され始め、原三国時代のある段階に鉄生産が開始されたことも分かっている(李南珪 2002、孫明助 2005、村上 2007)。

しかし、韓国での鉄に対する研究は、「鉄器の出現と展開」、「鉄生産の開始」など、鉄そのものに関心が集中し、日本やヨーロッパで議論されている「石器から金属器への転換」という視点での研究は少ない。金属器の導入によって石器に変化が生じるのは様々な地域で共通する現象であり、欧米や日本の研究(Ford et al. 1984、下條 1998、Butler 2009、Karimali 2010)では次のような共通した変化が指摘されている。すなわち、①器種の減少、②精製品の減少、③工具及び採炭・加工斧からの交代である。これに対し、鉄器出現期である粘土帯土器文化の石器研究は、むしろ生業との関連や(高ウンビョル 2012)、一時併存していた松菊里文化との関係(李ソクボム 2012)で検討されることが多い。

一方、日本考古学では鉄器普及による社会変化に関する研究も多く、弥生時代後期に鉄器が普及することで、石器だけではなく、既存の器物流通網全体が変化することが指摘されている(下條 1998、松木 1996、禰宜田 1998、他)。そのため、鉄器の普及は、この時期の社会再編の一つの要因として重要視される。製錬ができなくても鍛冶による再加工が可能になった時点で、日本列島では石器から鉄器への転換が開始されるが、朝鮮半島でも同じ状況にあることを

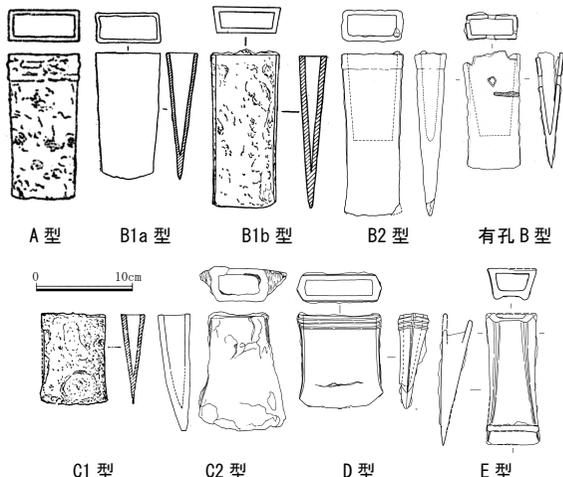
考慮すると、粘土帯土器文化の後半期に石器から鉄器への利器の転換があった可能性が高い。

そこで、本稿では、朝鮮半島における鉄器出現前後の編年と金属器との共伴関係を明らかにしたのち、石器の変化について検討を行う。そして、金属器導入と石器生産衰退に伴う流通の変化から、東北アジアにおける利器の鉄器化についての歴史的意義を問いたい。

### 2. 燕から鉄器拡散

中国東北地方から朝鮮半島に広がる最初期の鉄器は燕に由来することが知られている。武器や一部の工具が鍛造品であり、農具と一部の工具が鋳造品である。そして、鉄斧は鋳造品であり、農具の鏝が含まれている。

鉄斧の変遷については以前に整理したことがあるので、詳述はしないが、図1に示したような型式が東北アジアに分布していた(中村 2012)。時期的には、戦国時代後期に普及して



A型：易県燕下都武陽台22号工房 B1a型：救漢旗老虎山 B1b型：易県燕下都解村東北3号墓 B2型：扶餘合松里 有孔B型：長水南陽里1号墓 C1型：易県燕下都辛庄頭30号墓 C2：大同中里 D型：福岡御床松原 E型：永川龍田里

図1 戦国時代後期～前漢の鋳造鉄斧(中村 2012より)

\* なかむら・だいすけ

埼玉大学大学院人文社会科学研究所准教授

いた B1 型が後まで継続するが、秦・前漢前期には、これから変化した B2 型が成立する。C2 型は前漢中期以降に朝鮮半島にも出現する。

遼東地域では、戦国時代後期に燕本国にはない有孔 B 型鉄斧や鉄戈があることから、戦国時代後期から少しずつ燕国鉄器の規範からはずれた鉄器が生まれ始め、秦・漢代には新しい鉄器の影響も受けつつ、より燕の規範からはなれた鉄器が製作された。前漢前期には私営鉄器工房を容認した時期があり（潮見 1982、白 2005）、それがさらに型式的な変容を招いたのだろう。また、先に滅亡した諸国の工人が再編され、この地域の鉄器の変化に関与した可能性も考える（中村 2012）。

遼東地域でも辺縁に近い岫岩城南の鉄器は、燕系統であるが、漢代になってからの器種が混じっており、まさにそのような時期の産物である（図 2）。また、この時期には近接した遺跡でも型式の異なる鉄器がみられる。本来、燕の工房が複数あり、それらの一部が私営化することで、より鉄器に多様性が生じたとのだろう。この状況が朝鮮半島の鉄器にも影響する。

一方、戦国時代後期～前漢前期は、朝鮮半島南部の粘土帯土器文化後半期に該当する。朝鮮半島南部で鉄斧が検出される場所は、墓に限られ、集落からは出土しない。また、破損した石器を修理・改変するための鍛冶遺構も粘土帯土器文化末期～原三国時代早期まで確認されていない。しかし、鉈を鉄鏃に改変した事例が安城萬井里にあることから、ある程度の再加工が行われていたことは確かである。そして、集落では、鉄器は直接出土しないものの、利器である石器に変化がおこっている。ただし、墓からは青銅製利器も出土しており、青銅製利器が最初に出現し、次に鉄製利器が出現したという段階的な関係が石器の変化に影響した可能性も否定できない。そのため、まずは土器変遷と金属器の同伴関係を明らかにする必要がある。

### 3. 鉄器出現前後の様相

#### (1) 青銅製利器の出現時期

朝鮮半島南部の粘土帯土器文化は I～IV 期に区別される（中村 2008、2010a、2010b）。I 期は新式遼寧式銅劍の段階、II 期は細形銅劍成立段階、III 期前半が多鈕粗文鏡の最終段階かつ銅矛と銅戈が出現する段階、III 期後半が鉄器の

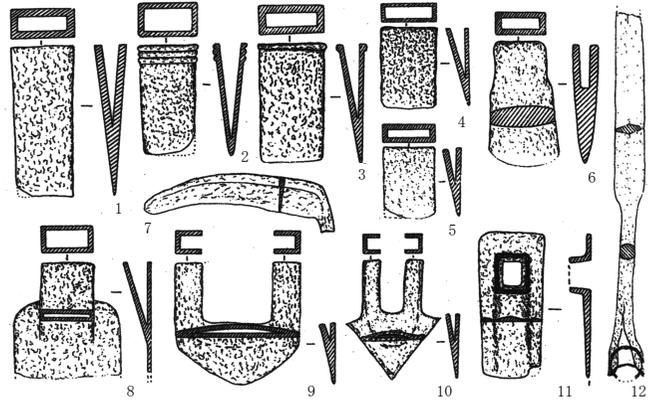


図 2 岫岩城南出土鉄器（中村 2012 より）

出現段階、IV 期が三角形粘土帯土器の形成段階である。多鈕細文鏡は II 期に出現したのち、III 期に文様の精緻化が進行する。本稿では時代区分としての初期鉄器時代は III 期後半～IV 期に限定する。

石製利器の衰退を考える上では III 期後半が重要であるが、III 期には銅斧、銅鑿といった青銅製利器も少なからず出土している。また、湖南地方南端の靈岩では、この時期の青銅製利器を製作した鋳型が多数出土している。

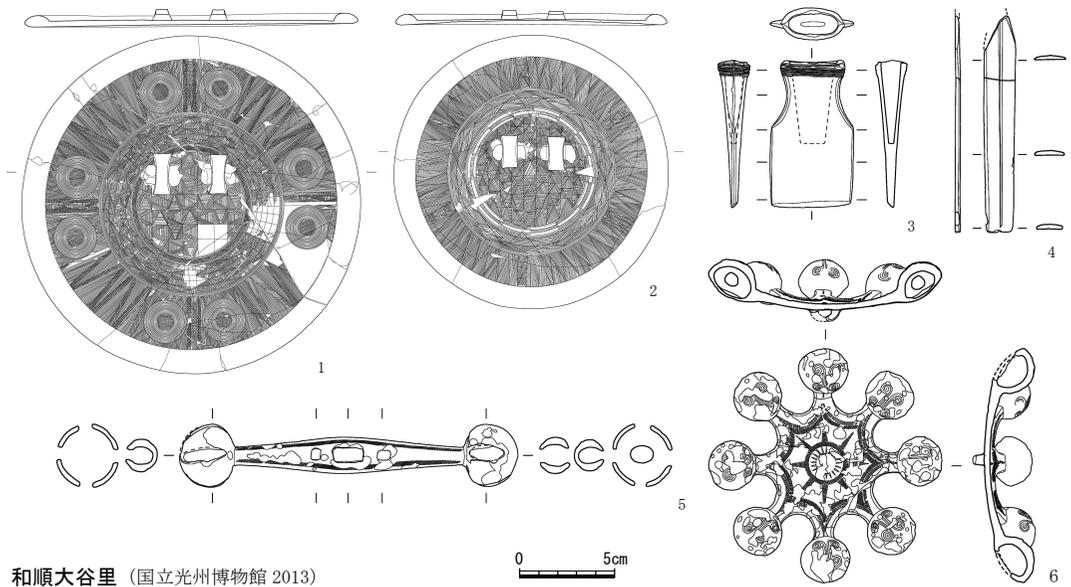
従来の編年では青銅製利器と青銅製鈴類が副葬される和順大谷里、咸平草浦里などは鉄器出現前と理解されることが多いため（図 3、李健茂 1992a、広瀬 1993、宮里 2007）、これに従った場合、前述したように青銅製利器の影響による石器減少の可能性も考える。ただし、上述の編年は副葬品の組み合わせと青銅器の型式学的な検討によってなされており、土器の変遷との対応に不明瞭な点が残されている。

幸いなことに、近年では、現在の全羅北道の完州で、土器を伴った事例が増加しており、土器の変化と青銅器の変化との対応関係を再考することが可能となっている。以下では新資料を中心とした土器変遷を示す。

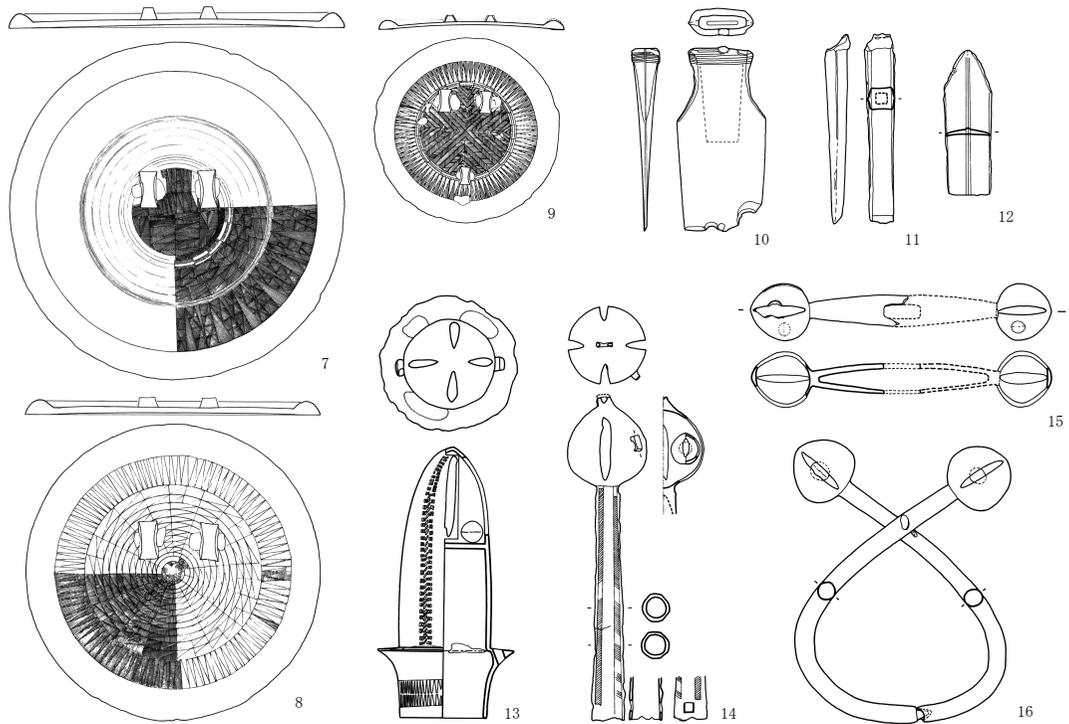
#### (2) 土器の変遷

粘土帯土器の変遷については、上述したようにすでに全体的な流れを示しているが（中村 2010）、鉄器を検討した際、B II 型鉄斧の出現によって、III 期後半を二分することができた（中村 2012）。そこで、本稿では III 期前半を III-1 期、III 期後半の古段階を III-2 期、III 期後半の新段階を III-3 期として土器の変遷をみる（図 4）。

まず、粘土帯土器（罐）については、III-1 期



和順大谷里 (国立光州博物館 2013)



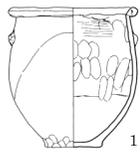
咸平草浦里 (国立光州博物館 1988)

図3 湖南地方南部における武器以外の副葬品 (S=1/4)

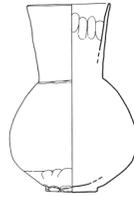
は円形粘土帯土器しかなく、胴部から口縁部へ内傾しながら立ち上がるが、口縁部の窄まりが小さい(図4-1)。Ⅲ-2期になると、胴部最大径よりも口縁部がより小さくなり、窄まりが大きくなる。また、口縁部の粘土帯の接合の際に施される回転ナデが強くなり、口縁内面の屈曲が

強い器種が出現し始める(図4-4・5)。Ⅲ-3期も同様の傾向にあるが、口縁外面にも回転ナデによる窪みが生じるものもある(図4-10)。Ⅳ期には強い回転ナデによって生じた垂下した粘土帯をもつ三角形粘土帯土器が成立する(図4-16)。基本的にⅢ期からは胴部最大径が下

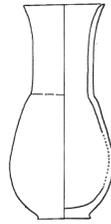
Ⅲ-1 期



1



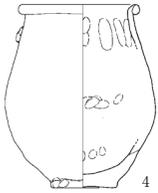
2



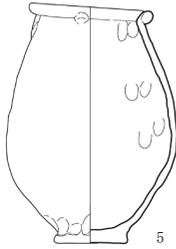
3

- 1・2 安城盤諸里 2 号墓
- 3 扶餘九鳳里
- 4・6 完州葛洞 3 号墓
- 5・7・8 完州新豊カ-53 号墓
- 9 完州新豊ナ-1 号墓
- 10・11・14 完州新豊カ-55 号墓
- 12 完州新豊カ-43 号墓
- 13 完州葛洞 5 号墓
- 15・16・19 完州葛洞 4 号墓
- 17・18 完州新豊カ 54 号墓

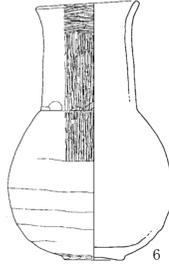
Ⅲ-2 期



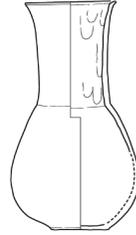
4



5



6



7



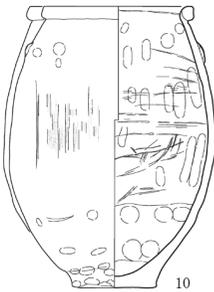
8



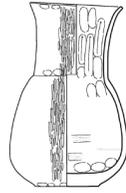
Ⅲ-3 期



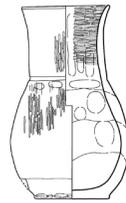
9



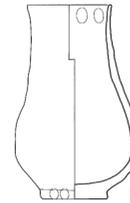
10



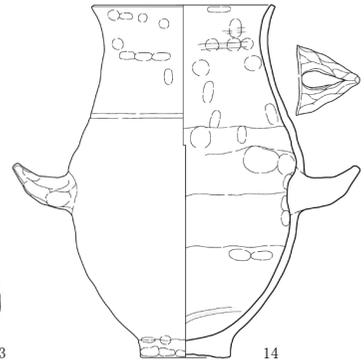
11



12

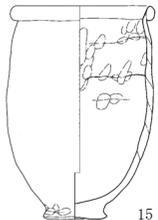


13

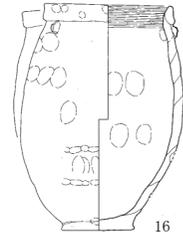


14

Ⅳ期



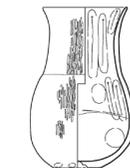
15



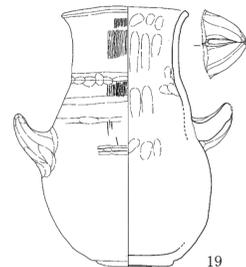
16



17



18



19

盤諸里：中原文化財研究院 2007 九鳳里：李康承 1987 新豊：湖南文化財研究院 2014 葛洞：湖南文化財研究院 2005・2009

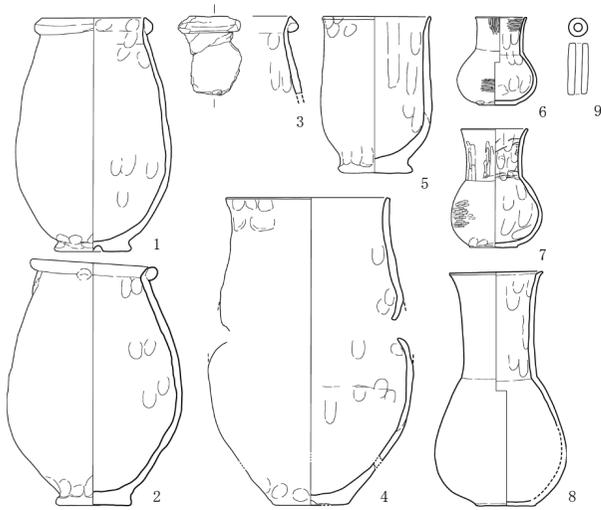
図 4 粘土帯土器の変遷

ってくるが、小型品ほどその傾向が強い。

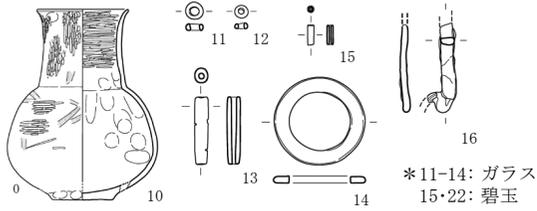
次に黒色磨研長頸壺をみてみよう。Ⅲ-1 期から、胴部が丸いもの（図 4-2）と、細長いもの（図 4-3）の二系統が存在する。Ⅲ-2 期には口縁端部の外反が強くなるとともに、胴部最大径が下がる（図 4-6～8）。Ⅲ-3 期には全体的に胴部が細長くなり、胴部と頸部の境界が曖昧なものが出現する（図 4-13）。また、境界を示すために、胴部と頸部の間に沈線を施す資料もこの

時期から出始める（図 4-12）。Ⅳ期には板状の高台を呈した平底が退化し、丸底に近いようなものが含まれるようになる（図 4-18）。

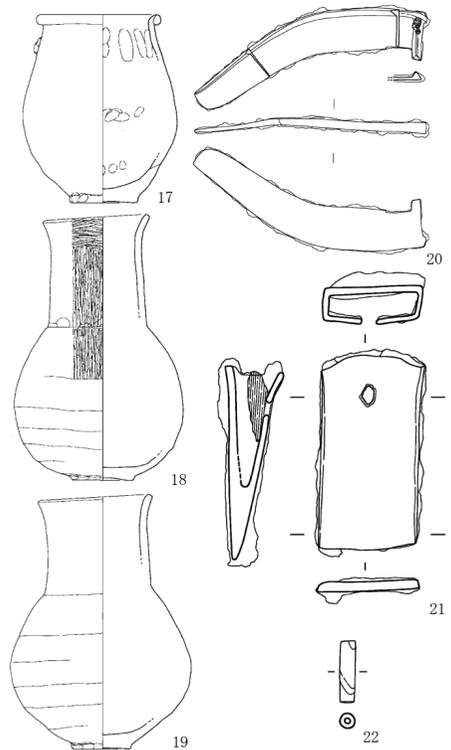
このほか、原三国時代早・前期の筒形土器に連続すると考えられる土器がⅣ期の完州新豊カ-49 号墓で出土し、松菊里系土器らしき外反口縁土器が、湖南地方ではⅣ期まで存続するという状況もみられる。嶺南地方の原三国時代早・前期の土器組成の成立を考える上で、重要な資



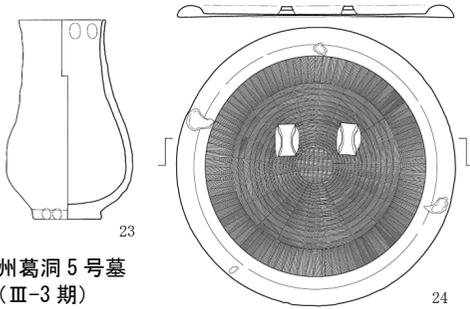
完州新豊カ-53号墓(Ⅲ-2期)



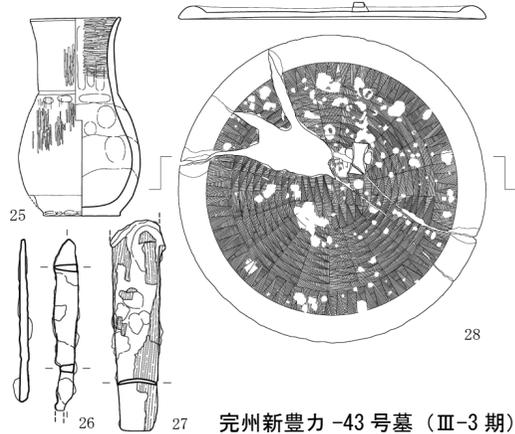
完州新豊カ-42号墓(Ⅲ-2期)



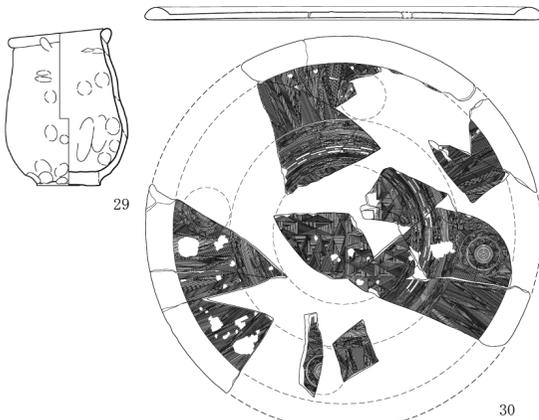
完州葛洞3号墓(Ⅲ-2期)



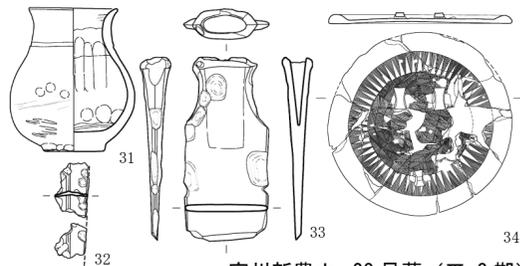
完州葛洞5号墓  
(Ⅲ-3期)



完州新豊カ-43号墓(Ⅲ-3期)



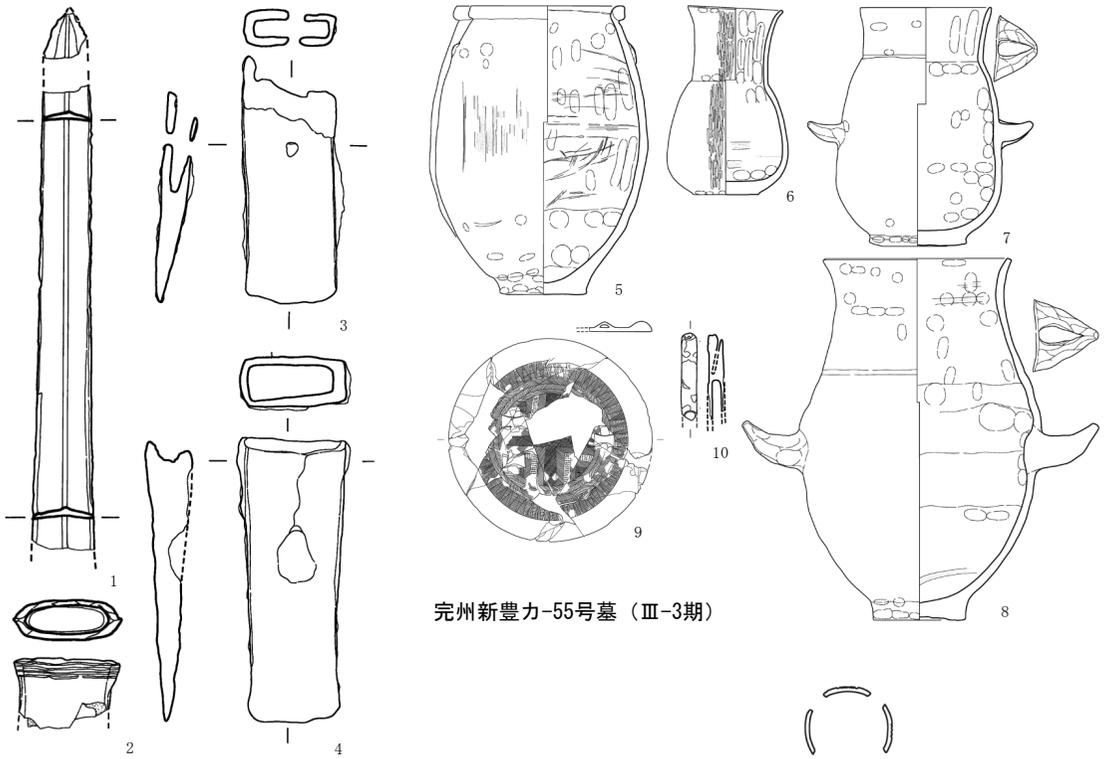
完州新豊ナ-1号墓(Ⅲ-3期)



完州新豊ナ-23号墓(Ⅲ-3期)

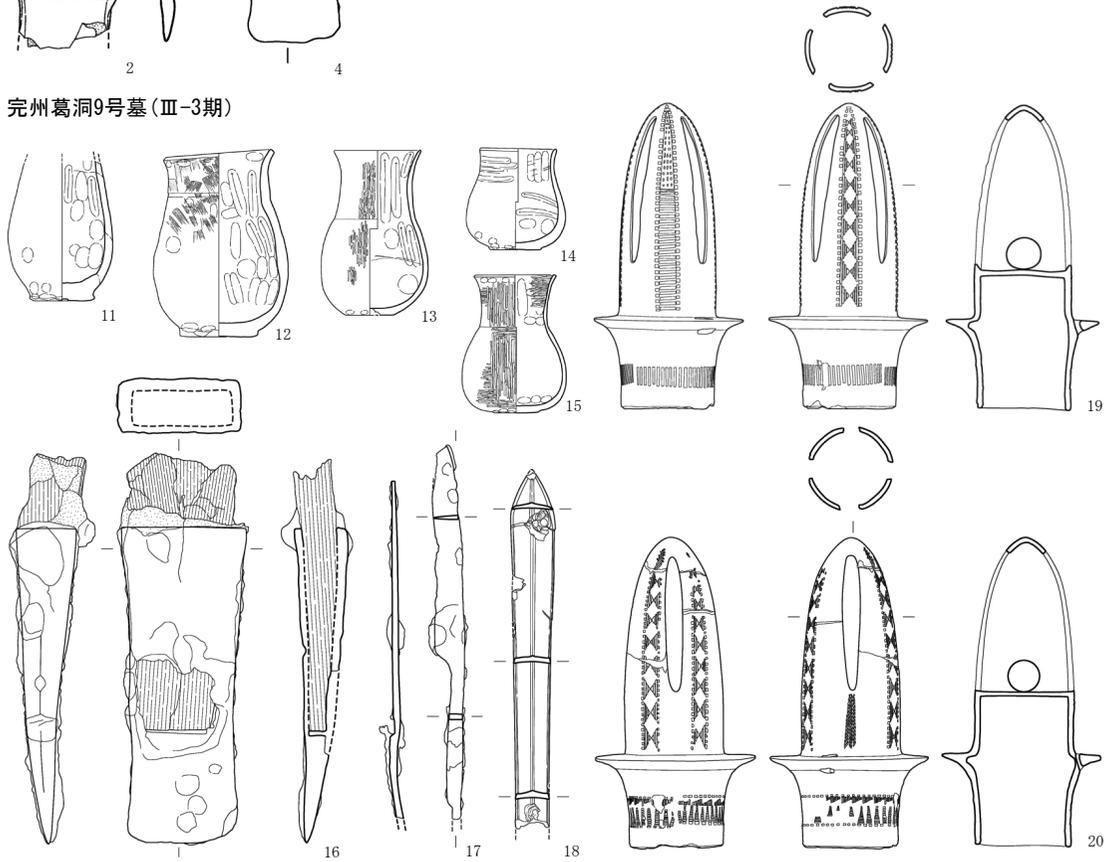
新豊：湖南文化財研究院 2014 葛洞：湖南文化財研究院 2005・2009

図5 湖南地方北部の武器以外の副葬品1 (土器:S=1/8, 青銅器・玉類:S=1/4, 鉄器:S=1/4 \*20のみS=1/8)



完州新豊力-55号墓（Ⅲ-3期）

完州葛洞9号墓（Ⅲ-3期）



完州新豊力-54号墓（Ⅳ期）

新豊：湖南文化財研究院 2014 葛洞：湖南文化財研究院 2005・2009

図6 湖南地方北部の武器以外の副葬品 2（土器：S=1/8，青銅器・玉類：S=1/4，鉄器：S=1/4）

料といえるが、これについては別の機会に検討したい。なお、原三国時代とそれ以前の層位による区分は明瞭ではないものの、光州新昌洞遺跡でもⅣ期に該当する土器が大量に出土している(国立光州博物館 2003)。

### (3) 青銅器と鉄器の共存時期

土器編年に沿って、湖南地方北部から出土した完州葛洞と完州新豊の新資料について、青銅器と鉄器の共存関係を示したのが、図 5・6 である。完州葛洞及び新豊にはⅢ-1 期の資料はみられないが、Ⅲ-2 期～Ⅳ期まで存続する。

まず、鉄器は、新豊カ-42 号墓、葛洞 3 号墓の事例によって、Ⅲ-2 期から存在することがわかる(図 5-16・20・21)。図 5-16 は燕でみられる鉄製刀子であり、柄の端部が刃部方向に一度屈曲して環頭部を形成する形態である。原三国時代前期の茶戸里 1 号墓出土例のような環頭部が楕円形のものとは異なっている。鉄斧は短いもの(図 5-21)が最初に出現し、Ⅲ-3 期以降、細長い形態のものが出現する(図 6-3・4・16)。鉛バリウムガラスの玉類(図 5-11～14)もⅢ-2 期から出現している。

多鈕細文鏡(図 5-24・28・30・34、図 6-9)は、葛洞と新豊では、Ⅲ-2 期には共存せず、全てⅢ-3 期に伴う。対向三角文のみで構成されるものも、同心円文をもち、円圏帯で区画されるものも、大きな時期差はないようである。また、Ⅲ-3 期の多鈕細文鏡の外区の対向三角文は全て、底辺と垂直二等分線の割合が 1:2 以上であり、極めて細長い。そして、銅鉈と有肩銅斧もⅢ-3 期から出現し、Ⅳ期まで存続する(図 5-32・33、図 6-1・2・18)。

もちろん、銅斧はⅡ期の牙山南城里、Ⅲ-1 期の扶餘九鳳里(図 7-3・4)にもあり、粘土帯土器文化の最初から存在していたと考えられる。では、Ⅲ-2 期を遡る段階から石器に変化が生じていたかという点、結論が先となるが、そうした様相は認められない。扶餘九鳳里では多量の青銅器とともに、伐採斧(両刃石斧、図 7-10)が副葬されており、破損はしているものの、実用に適った優品である。序論にてふれた利器の金属化に伴う精製品の減少、すなわち仕上げの手抜きなどはみられない。粘土帯土器文化Ⅱ～Ⅲ-1 期の保寧校成里の集落出土の石斧類をみても、丁寧なつくりであり、青銅製の工具類が石器に影響しているとはいえない。

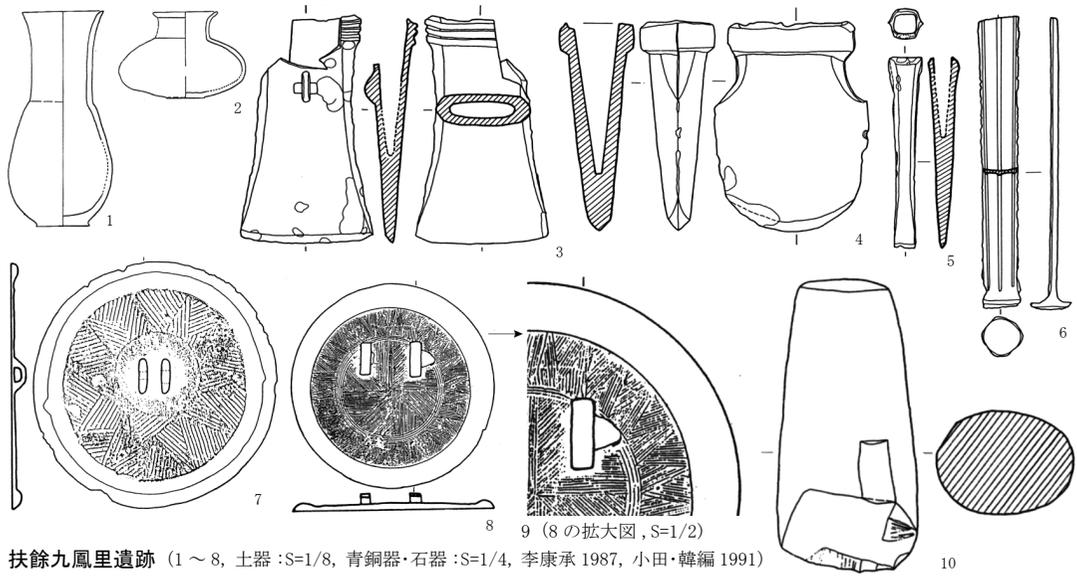
次に青銅製利器の生産を示す靈岩鑄型の時期を明らかにするため、銅斧の型式変遷をみてみよう。扶餘九鳳里から出土した銅斧の一点は、

刃部の平面形態が丸い有肩式(半月刃有肩式)で、釜部の端部が肥厚した型式である(図 7-4)。もう一点は、釜部に三条突帯をもつ撥形である(図 7-3)。完州葛洞及び新豊から出土したⅢ-3 期の銅斧は有肩式であるが、刃部の平面形態が方形(方形刃有肩式)であり(図 5-33)、型式が異なる。靈岩の銅斧鑄型は、方形刃有肩式が 2 種、半月刃有肩式が 1 種、細長い撥形が 1 種の、計 4 種類がみられる(図 8)。そのうち、半月刃有肩式は釜部の端部に三条の突帯をもつ型式であり、扶餘九鳳里の銅斧とは異なる。三条突帯をもつ撥形銅斧は(図 8-1)、細部に異なる部分をもつが、形態的には扶餘九鳳里と同じである。従って、Ⅲ-1 期の資料に共通する型式を有しつつも、Ⅲ-3 期に完全に一致資料する型式を有することから、靈岩鑄型はⅢ-2～3 期に該当すると推定されよう。鑄型自体の系譜については後藤直(1996)の詳細な研究を参照されたい。

さて、問題は鉄器出現以前とされることが多い和順大谷里や咸平草浦里であるが(図 3)、銅斧の型式から考えるとⅢ-3 期に該当する可能性が高い。多鈕細文鏡の型式もこれを裏付ける。多鈕細文鏡は、Ⅲ-3 期の新豊カ-43 号(図 7-13)などを参照しても、Ⅲ-1 期の扶餘九鳳里の資料から急激な文様な細密化が認められ、形式的な飛躍がある。そこで、極めて単純な指標ではあるが、外区の対向三角文の形態変化に着目してみよう。

扶餘九鳳里の多鈕細文鏡の対向三角文の底辺と垂直二等分線の比は 1:1.4 程度である。和順大谷里の小さい方の鏡(図 7-12)の対向三角文は、ばらつきが大きく、底辺と垂直二等分線の比は 1:1.9～1:3.5 である。対向三角文においては、この鏡が発掘資料のなかでも最も九鳳里に近いが、内区との境の円圏帯も複雑で、やはり形式的に飛躍があることは否めない。収集資料ではあるが、その間を埋められそうな資料としては、崇実大学校所蔵鏡(図 7-11)がある。対向三角文はややばらつきがあるものの、1:1.6 程度である。円圏帯も九鳳里よりは複雑化しているが、和順大谷里や咸平草浦里ほど緻密ではない。今後、Ⅲ-2 期に伴う多鈕鏡として、この型式が出土することを期待したい。なお、宮里修(2007)は文様などの詳細な検討から、和順大谷里を咸平草浦里に先行する段階と位置付けており、筆者も上述した理由から賛同する。しかし、土器編年上はⅢ-3 期に収まり、大きな時期差はないようである。

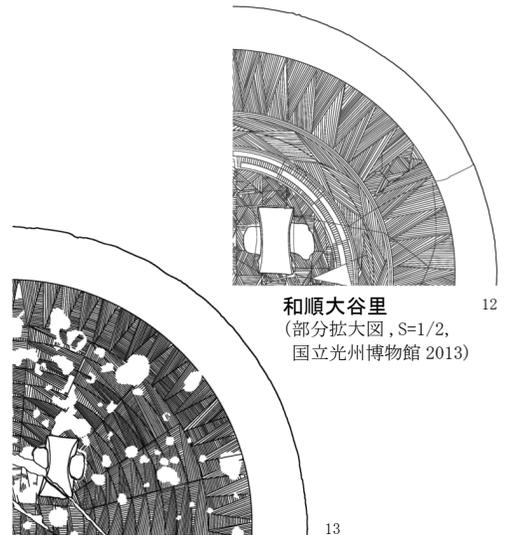
ところで、完州新豊カ-54 号墓からは竿頭鈴(図 6-19・20)が出土している。岡内三眞(1983)、



扶餘九鳳里遺跡 (1~8, 土器:S=1/8, 青銅器・石器:S=1/4, 李康承 1987, 小田・韓編 1991)



崇実大学校所蔵資料  
(出土地不明, S=1/2, 崇実大学校韓国基督教博物館 web site)



和順大谷里  
(部分拡大図, S=1/2, 国立光州博物館 2013)

完州新豊カ-43号墓  
(部分拡大図, S=1/2, 湖南文化財研究院 2014)

図7 多鈕細文鏡の変化

李健茂 (1992b)、宮里修 (2007) の竿頭鈴の編年を参照すると、鈴部の仕切り板が全長の半分ほどの位置にあることから、本稿のⅢ・3期である咸平草浦里に後続する型式といえる。この鈴部の広さは、原三国時代早・前期の慶州竹東里や慶州入室里の事例に類似する。ただし、文様が精緻であること、鏢部の内面が入室里や竹東里のように直線的ではなく、草浦里のように鏢の突出方向に沿って鋭角に窪んでいることから、入室里や竹東里よりは古い様相をもつといえる。従って、新豊カ-54号墓の竿頭鈴は、共伴する土器の様相に従って、粘土帯土器文化Ⅳ

期に位置づけられる。

以上の内容を整理すると、霊岩鑄型のような青銅製利器の多量の生産を予感させる段階は、Ⅲ・2~3期であり、細密な多鈕細文鏡とともに副葬されるのは、Ⅲ・3期が中心であることがわかった。Ⅲ・2期にはすでに鉄器が出土していることから、少なくとも、青銅製利器が石器の衰退に主体な役割を果たしたとはいえない。鉄器の出現こそが、利器の金属器を促したといえよう。次章ではこの結果を受け、粘土帯土器文化がみられる遼東地域から朝鮮半島南部までの石器から鉄器への変化に対する検討を進めたい。

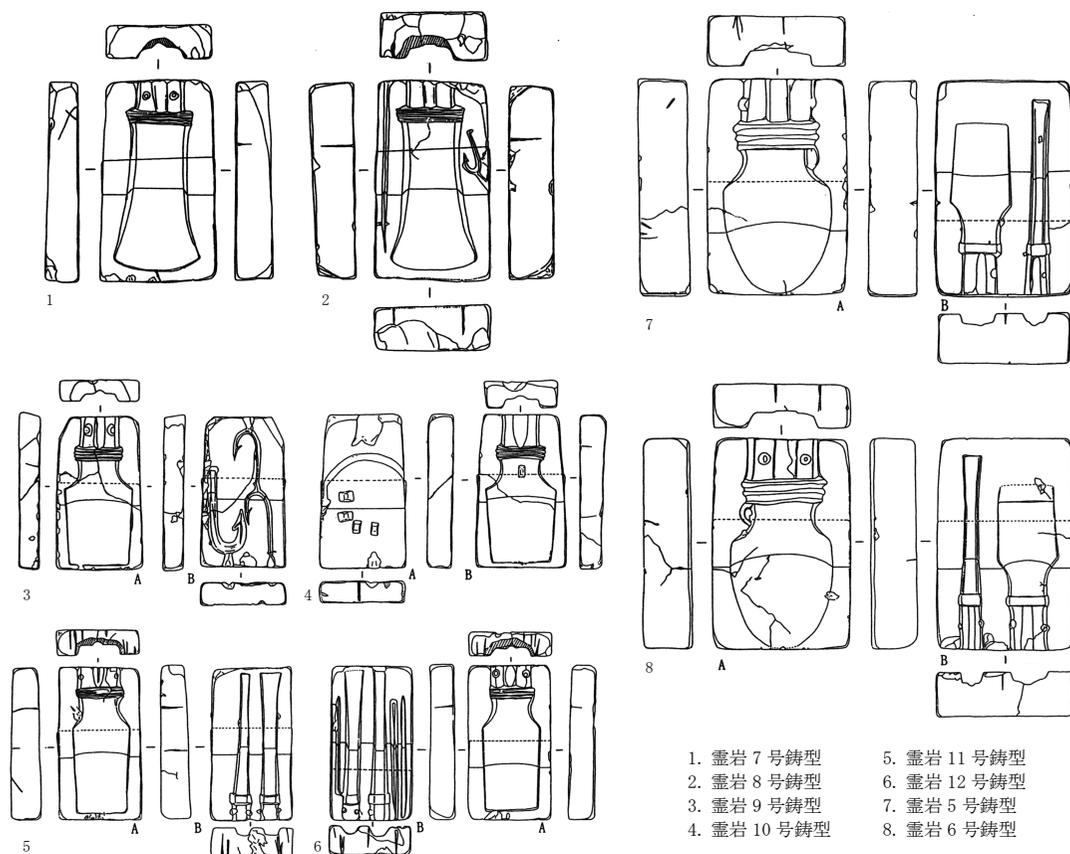


図8 霊岩出土の青銅製工具の鋳型 (S=1/6, 後藤1996を改変)

#### 4. 石器の変化

##### (1) 遼東地域

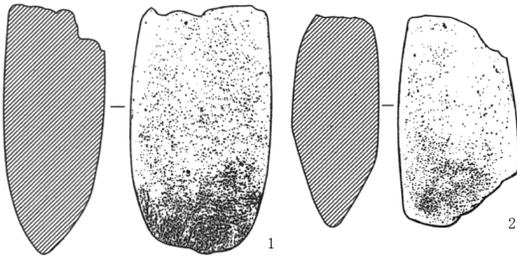
青銅製利器が一般的に普及するのは基本的には遼西地域までであり、夏家店上層文化の段階には石器の役割は小さくなっている。青銅製工具が普及しており、石斧は存在はするものの、小さく、かつ少ない。遼東地域及びそれ以南ではやや事情が異なっている。

遼東地域から松花江流域については、確かに銅斧及びその鋳型が存在するが、少なくない量の石斧も鉄器出現期まで残存している。銅斧は戦斧の可能性もあるが、鑿などは利器で間違いない。撫順蓮花堡では石斧類と鉄斧類はみられるが、青銅製工具類は出土していないことから、この地域では青銅製利器が、石器の変化に及ぼした影響は極めて小さいといえよう。

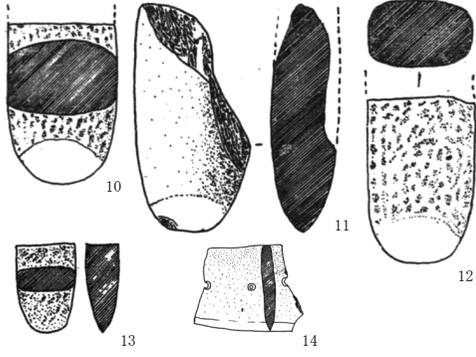
さて、石器については、戦国時代後期と限定できる資料は少ないが、燕の鉄器が出現した後も伐採斧と加工斧が残存する(図9)。現在の西豊県や開原市のある山地部では、特に伐採斧が

多いようである。また、全体的に石包丁が残存しているのも特徴の一ついえよう。石斧の精製度については報告からは判断が難しい。

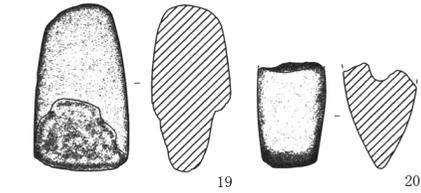
一方、前述した撫順蓮花堡では、伐採斧と考えられるA型鉄斧、加工具である鉄鑿、収穫具である鉄製摘鎌が出土しているが、それらと機能的に対応する石器が出土している。鉄器80点と比較して、石器は9点であることも考慮すると、まさに石器から鉄器へ移り変わる様相を示す遺跡といえよう。そして、前漢前期の鑄造鉄器が多量に出土した岫岩城南(図2)では石器はみられないので、約100年で石器から鉄器の交代が完了するといえる。精製度の低い石斧類もみられないことから、変化が極めて急速であったことが窺える。戦国時代後期には遼東地域で燕の拠点が形成されていることと関係するだろう。なお、撫順蓮花堡では、ガラス小玉も出土しており、朝鮮半島南部の粘土土器文化Ⅲ-2期の副葬品の全てが網羅されている点にも注意したい。



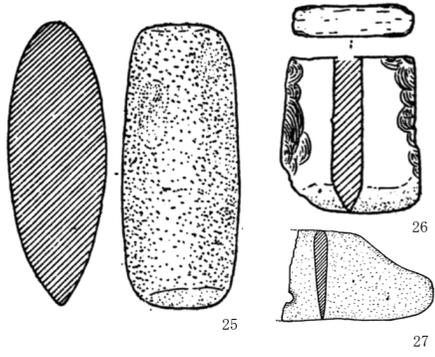
西豊永淳 (戦国時代, 遼寧省文物考古研究所・他 2011)



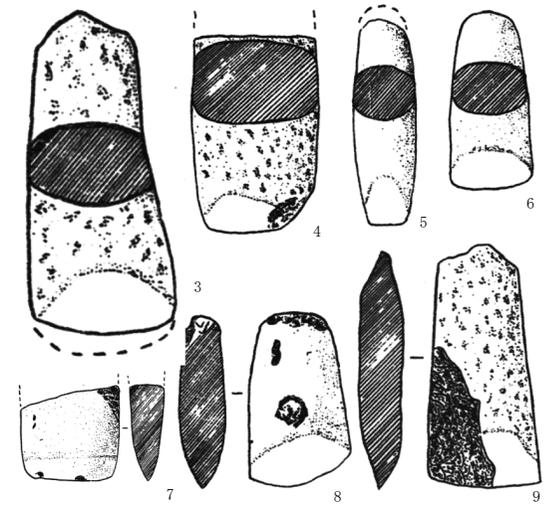
開原団山 (戦国中～後期, 鉄嶺市博物館 1992)



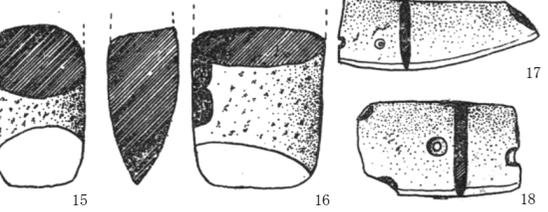
西豊東溝 (戦国時代後期, 遼寧省文物考古研究所・他 2011)



撫順蓮花堡 (戦国後期～秦, 鉄器は一部を抜粋, 王 1964)



西豊沙河 (戦国中～後期, 鉄嶺市博物館 1992)



西豊山門卡 (戦国時代後期, 鉄嶺市博物館 1992)

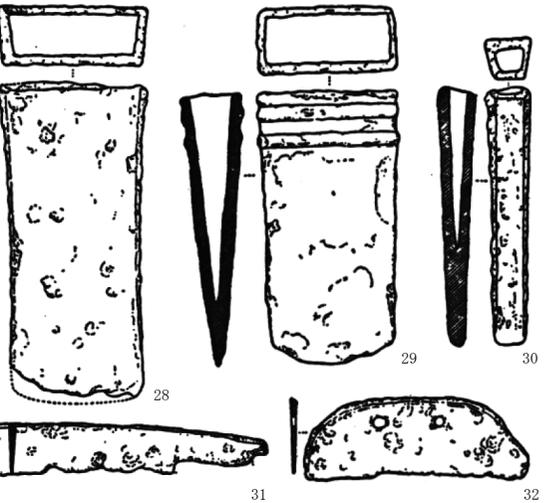
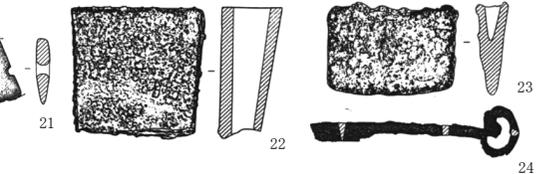


図9 遼東地域の石器と鉄器

## (2) 朝鮮半島南部

粘土帯土器文化は青銅器時代と初期鉄器時代にまたがり、前述したように、後者において墓に燕系の鑄造鉄斧が副葬される。粘土帯土器文化の石器は在地の松菊里文化群のものを継承しており、起源地である遼東地域のものとは異なる。

鉄器出現前後の時期を含む粘土帯土器文化の大集落である安城盤諸里では、未成品や用途不明の資料を含めても石器総数は39点であった。その内、伐採斧は1点、加工斧は4点である。この集落の半分の規模である青銅器時代後期の保寧寛倉里F地区では石器総数は192点であり、伐採斧7点、加工工具36点が含まれる。初期鉄器時代には全体的に石器が減少する傾向にあり、斧の比率も下がっている。ただし、加工斧が伐採斧よりも多いという傾向は青銅器時代後期から継承している。

粘土帯土器文化でも青銅器時代後期段階では、石器生産を行っている遺跡もある。大邱燕岩山では、伐採斧3点、加工斧68点の未製品が出土しており、5点を除く全てがホルンフェルス製であった(図10-4~9)。この遺跡を含む嶺南地方では、青銅器時代後期からホルンフェルスが豊富で、大型の石剣や加工斧を製作し、朝鮮半島南部各地に搬出していたことが指摘されている(図11、黄2011)。この地域の粘土帯土器文化は石材、石器型式ともにこれを継承している。金海大渚では数量は多くないが、堅固な伐採斧と加工斧が出土しており、在地の青銅器時代文化に属する資料と比しても遜色がない(図10-10~12)。

しかし、初期鉄器時代になると、加工斧のなかでも柱状片刃石斧に変化がみられる。嶺南地方の陝川盈倉里(図10-16)、京畿地方の安城盤諸里(図10-13~15)ともに、溝のある面の頂部を平らにせず、未製品の形態に近いまま使用する資料が確認される。安城盤諸里14号住居のそうした柱状片刃石斧に伴うのは、ナデによってやや垂下したような外観をもつⅢ-2期以降の粘土帯土器である。

柱状片刃石斧は、青銅器時代後期では、保寧寛倉里B区域100号住居出土資料のように、自然面を残すものも含まれるが(図10-1)、全面研磨され、面取りがなされる。安城盤諸里のものとは全てが面取されておらず、石器製作に対するゆらぎが生じているといえよう。

## (4) 小結

以上の様相から、粘土帯土器文化においては、

石製利器は鉄器出現期にも、加工斧、伐採斧ともに残存するが、急激に減少し、変質する様相が把握された。ただし、遼東地域については、燕の拠点ができる前の段階が判然としないので、時間的経過に従って、どのように石器が減少していったかは不明瞭である。とはいえ、少なくとも朝鮮半島南部においては、石器の数量自体の激減に加え、精製度の低い加工斧が出現するという変化がみられるのである。

一方、鍛冶炉は初期鉄器時代末~原三国時代初頭(紀元前2世紀前半)に出現し、この段階から、確実に鑄造及び鍛造鉄器の再加工が可能となる(中村2015)。この時期は三角形粘土帯土器の段階であり、泗川芳芝里から、伐採・加工斧が15点程出土したという見解や(高ウンビョン2012)、包含層資料などから、石斧の残存を考える研究(李ソクボム2012)もあるが、時期が確定できる確かな資料はなく、砥石を除いて石器はほぼ消滅している。やはり、100年程度の急激な変化といえよう。次章ではこうした石器の変化が朝鮮半島南部の流通構造にどのような変化をもたらしたのかを検討してみたい。

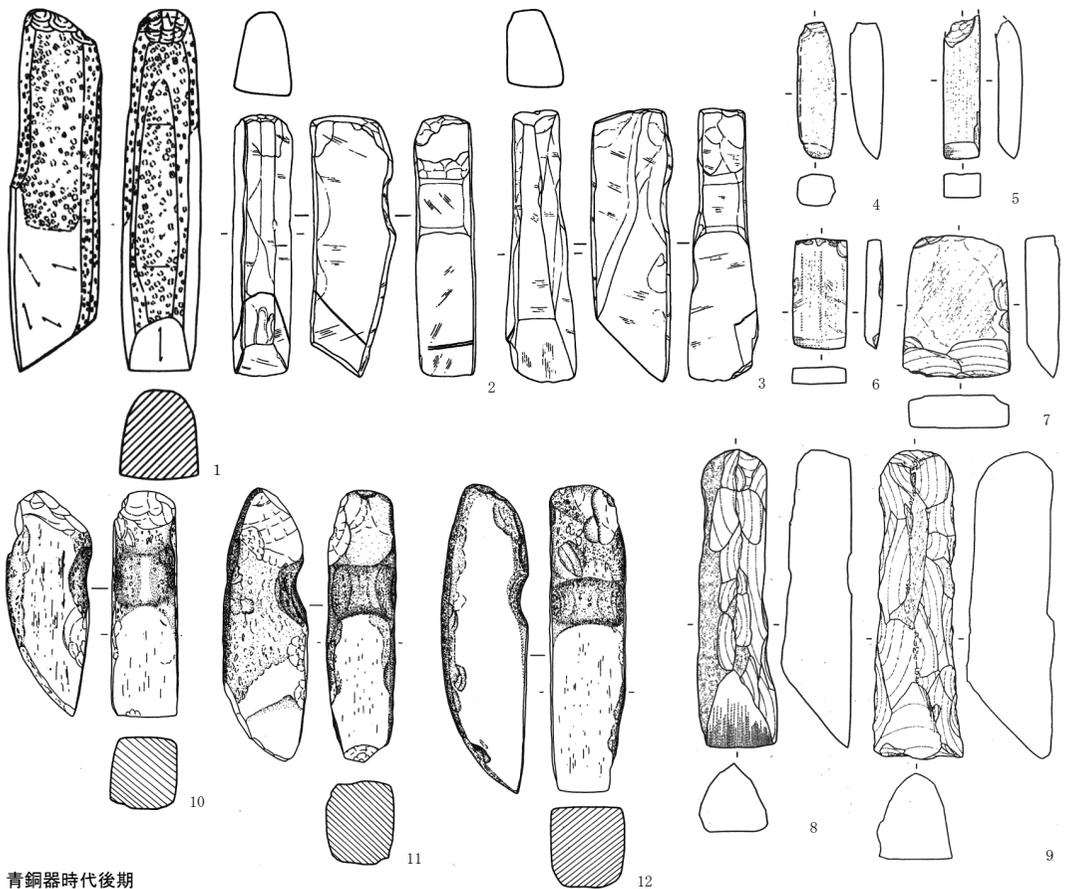
## 5. 流通の変化

青銅器時代後期から初期鉄器時代の流通についての研究は多くないが、石器については、前述したように、朝鮮半島東南部の嶺南地方から南部全体にホルンフェルス製の石剣や加工斧が搬出されていた(図11、黄昌漢2011)。また、藁科哲男と筆者らが理化学的分析による産地同定に取り組んできた碧玉製管玉も朝鮮半島南部全体に広域に流通する(金奎虎・金庚澤・他2012、中村2013)。

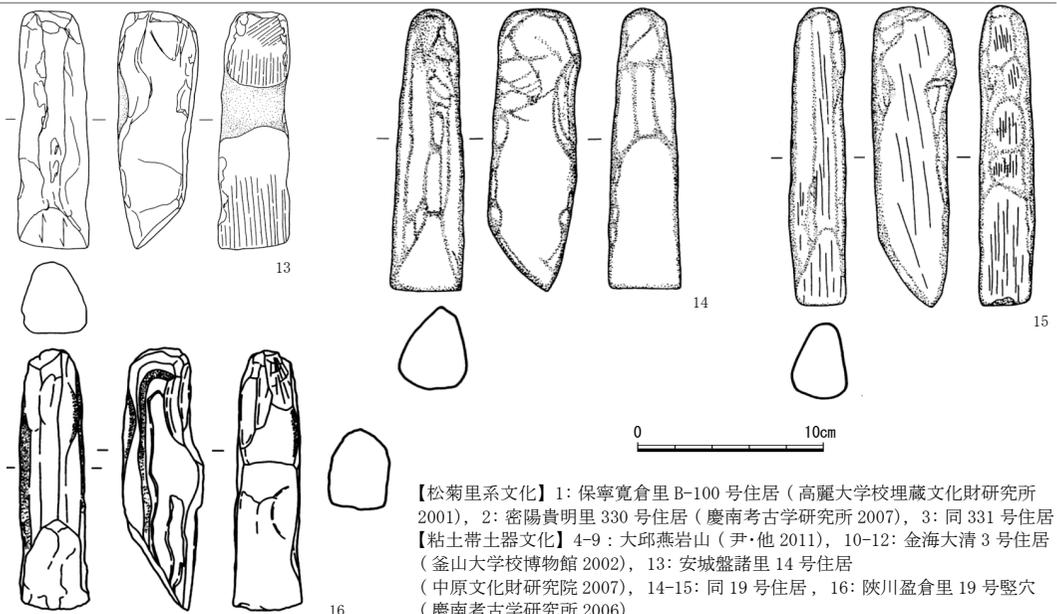
朝鮮半島南部の碧玉原産地は不明であるが、蛍光X線分析を行ったところ、現時点で、大きく分けて二つのまとまりが確認される。それが「未定C群」と「寛倉里A群」である。

未定C群は弥生時代初頭に日本列島にも流通する碧玉であるが、朝鮮半島ではそれより古い段階から存在し、青銅器時代後期には90%以上が該当する。そして、その流通範囲は朝鮮半島南部全域に及ぶ。大型品が嶺南地方南部から湖南地方東南部の麗水半島に多いため、こうした地域に流通の中心があったと推定される。寛倉里A群は朝鮮半島中西部の湖西地方を中心として、青銅器時代後期の松菊里文化の範囲に流通する。そして、これらは初期鉄器時代になっても粘土帯土器文化の墓から出土する。

従って、碧玉製管玉については、嶺南地方から朝鮮半島南部全体に広がる交易網と、湖西地



青銅器時代後期



初期鉄器時代

【松菊里系文化】1: 保寧寬倉里 B-100 号住居 (高麗大学校埋藏文化財研究所 2001), 2: 密陽貴明里 330 号住居 (慶南考古学研究所 2007), 3: 同 331 号住居  
 【粘土帶土器文化】4-9: 大邱燕岩山 (尹・他 2011), 10-12: 金海大清 3 号住居 (釜山大学校博物館 2002), 13: 安城盤諾里 14 号住居 (中原文化財研究院 2007), 14-15: 同 19 号住居, 16: 陝川盈倉里 19 号竪穴 (慶南考古学研究所 2006)

図 10 朝鮮半島南部の加工斧



ったといえよう（下條 1998）。北部九州の指導者層の交易は、威信を示す青銅器類などが中心であったが、弥生時代中期の終わりには、日常道具である利器の獲得にも長距離交易が必要となったのである。今山の玄武岩製伐採斧の流通が衰退するほどの鉄器がもたらされたことになる点には注意したい。

近畿地方でも加工斧が伐採斧に対して少なく、弥生時代後期までこの傾向が続く。ただし、近畿地方の西部に位置する播磨地域だけは例外であり、弥生時代中期後葉において加工斧が伐採斧よりも多い（上田 2011）。さらに、こうした遺跡においては、有鼻遺跡や奈カリ与遺跡のように、加工斧と機能を同じくする鉄器が多くもたらされている。これらの遺跡の石製加工斧の多くは結晶片岩製であり、近畿地方全体でも、柱状片刃石斧の素材については、地域外の四国東部からきた結晶片岩が主体である可能性が検討されてきた（西口 2000、寺前 2011）。

この問題を詳細に検討した中村豊（2012）は、小型の石器を中心に紀ノ川流域からの片岩も流通するとしつつも、弥生時代中期後葉以降は、大型品の柱状片刃石斧の石材に関し、四国東部の藍閃石・塩基性片岩が近畿地方の広い範囲で流通していたことを明らかにしている。前述した播磨地域の柱状片刃石斧の素材は、大部分が藍閃石・塩基性片岩である。打製石器の素材であるサヌカイトとともに四国東部よりもたらされたといえよう。従って、播磨地域では、鉄器も含め、斧類を他地域に頼っていた様相が窺える。

また、近畿地方では、利器の鉄器化前に、加工具の一部が外部依存し始めていたといえるが、河内地域のように、二上山産サヌカイトの流通し、地域内の石製利器流通が弥生時代後期前半まで保たれる地域もある。地域内に有用な石材の流通網が残存する場合は、あくまで要因の一つでしかないが、石器利用が長引くようである。

一方、近畿地方の大阪湾周辺でも後期初頭の古曽部・芝谷遺跡のように、少量でも石製加工斧が入るようなところでは鉄器が豊富であり、加工斧が必要とされる場所において、鉄器と石器の流通が競合するような状況がみられる。播磨地域も同様の状況であっただろう。最終的には、播磨地域では後期前半に淡路島の五斗長垣内遺跡のような鉄器を再加工しうる鍛冶技術をもつ集落が近隣に定着したことで、石製加工斧はその役割を終えている。想像を逞しくすると、石製加工斧と鑿状鉄器の両方が出土する場所は、鉄器の有用性を理解するのに適した場所といえ、消費者の立場から利器の変化に関与し、地域社

会の流通変化を牽引しうる可能性をもっていたといえよう。

## (2) 朝鮮半島南部

朝鮮半島南部では、弥生時代中期中葉に併行する粘土帯土器文化IV期～原三国時代早期に利器としての石器が消滅することから、北部九州より早い段階で鉄器化が進行している。青銅器時代から初期鉄器時代を通じて、伐採斧より加工斧が多い。特に鉄器が早い段階にもたらされる湖西地方は、石製加工斧、鉄製加工具（鉄斧、鉄鑿）ともに他地域からもたらされたものである。つまり、ここでも鉄器の有用性を理解する機会があったということであり、前章にて述べたように、ホルンフェルス製の未製品の搬出が行われていた東部の流通網との関係を見直す状況が生じていたといえよう。ホルンフェルス製の石剣もまた粘土帯土器文化の人々は受容しておらず、その石材としての重要性は下がっていたこともすでに述べたとおりである。

湖西地方を含む西部の鉄と青銅は、初期は燕、その後は遼東地域の首長層を通じて安定的にもたらされていたが、楽浪郡が成立する前に途切れる。むしろ重要なことは、交易に頼っていたため、交易が滞ると、それまで豊富な副葬品を有していた首長層が急激に衰退した点にある。加えて、楽浪郡が成立した頃には東南部で鉄鉱石が産出し始めたため（中村 2015）、鉄器交易の中心が東部に移り、再び東部交易網が重要視されるようになった。交易を社会の基盤としていた西部では大きな打撃であり、衰退が長引く原因となったことは想像に難くない。

## (3) 小結

石材の有用性と流通の安定が保たれている場合は、石器の残存が長引き、地域内に流通網をもつ場合も、交代に時間がかかるようである。もちろん、鉄器自体の流通量と距離も関係するが、播磨地域や湖西地方の事例を考慮すると、利器素材を地域内の流通網にもたない地域のほうが、利器転換は早いようである。黒曜石などの有用な石材産地を有するエーゲ海地域のように、早くから青銅器生産が開始し、青銅製利器が普及しても 2000 年程、石鎌などの石製利器が残存する事例（Karimali 2009）もある。

## 7. まとめ

朝鮮半島南部の交易は、これまで述べてきたように、西部と東部の大きな二つの流通網に支えられていた。鉄器が早くに入る湖西地域は、

加工斧を東部の流通網に頼っている部分があり、交易が社会基盤の深くまで関わっていた。

これに対し、北部九州では、頭初は石斧類の流通網をその内部に保有しており、交易はリーダーの威信に関わるものに限定されていた。しかし、利器の鉄器化は、日本列島の場合は楽浪郡成立以降であるが、交易をより社会基盤の深くにまで関わらせる結果となった。北部九州で起こったこの変化は、その後、近畿地方の中心部にも訪れる。朝鮮半島の西側の場合は、それ以前から進行しており、楽浪郡以南の社会における最も早いモデルケースであったといえる。遼東地域も類似した変遷がみられるが、石製利器の産地と流通が判然としないため、朝鮮半島南部西側と同じ理由であったか、燕の領域化に入ったことによる急激な変化であったかは判断できない。

以上のことから、朝鮮半島や日本列島における鉄器化は、日常生活品に至るまでの道具の外部依存化を意味するといえる。交易の安定は各社会において必須条件となった。そのため、弥生時代の中期後葉から終末期に併行する段階においては、その安定を求め、外交関係も含めて日韓各地の政体の盛衰がめまぐるしく起こる。鉄器化こそが、その端緒といえるだろう。

一方、広い流通網と活発な交易を背景として、紀元前3世紀頃から鉄器が入ったのち、朝鮮半島南部では、紀元前2世紀後半には利器としての石器が早々に消滅するが、これはヨーロッパも含めた様々な地域の金属器化と比較してもかなり早い変化である。ただし、良い面ばかりがもたらされたわけではない。最終的には、漢の領域拡大に際して、この朝鮮半島西部の状況が視野に入り、楽浪郡の設置という結果を招いていた。この結果は、逆説的ではあるが、東アジア史的にもこの地域の交易の隆盛には、それだけ大きな意味をあったことを示唆している。

## 引用文献

尹容鎮・洪淳光・柳志煥 2011「燕岩山遺蹟出土石斧」『慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢』慶北大学校考古人類学科30周年記念考古学論叢刊行委員会  
上田健太郎 2011「播磨の弥生時代石器」『石器からみた弥生時代の播磨』第11回播磨考古学研究会実行委員会  
王増新 1964「遼寧撫順市蓮花堡遺址発掘簡報」『考古』1964-6  
慶南考古学研究所 2006『陝川盈倉里無文時代集落』

慶南考古学研究所 2007『密陽貴明里三国時代墓群』  
金奎虎・他 2012「銅合金遺物の材質及び特性分析」『広州驛洞遺跡』ハノル文化遺産研究院  
金奎虎・金庚澤・藁科哲男・中村大介 2012「韓半島中西部における玉類の産地推定」『日本文化財科学会第29回大会発表要旨』日本文化財科学会  
高ウンビョル 2012「慶南西部地域における粘土帯土器文化の生計経済研究」『韓国考古学報』82  
黄昌漢 2011「青銅器時代におけるホルンフェルス製磨製石剣の産地推定」『考古広場』9  
高麗大学校埋蔵文化財研究所 2001『寛倉里遺跡 B-G 区域』  
国立光州博物館 1988『咸平草蒲里遺蹟』  
国立光州博物館 2013『和順大谷里遺蹟』  
後藤直 1996「壺岩出土鏝型の位置」『東北アジアの考古学』第二 キンペン社  
湖南文化財研究院 2014『完州新豊遺蹟Ⅰ～Ⅲ』  
潮見浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館  
下條信行 1998『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7～9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書  
中原文化財研究院 2007『安城盤諸里遺蹟』  
土屋みづほ 2004「弥生時代における石器生産と流通の変遷過程」『考古学研究』第50巻第4号  
鉄嶺市博物館 1992「遼北東部地区幾処青銅時代遺址調査」『遼海文物学刊』1992-1  
寺前直人 2011「石器の生産と流通」『講座日本の考古学5』青木書店  
中村大介 2008「青銅器時代と初期鉄器時代の編年と年代」『韓国考古学報』68集  
中村大介 2010a「粘土帯土器文化と弥生文化」『季刊考古学』113号 雄山閣  
中村大介 2010b「粘土帯土器文化期から原三国時代の社会と副葬習俗の変化」『考古学研究』第57巻第1号  
中村大介 2012「燕鉄器の東方展開」『埼玉大学紀要教養学部』第48巻第1号  
中村大介 2013「朝鮮半島の玉文化研究の展望」『玉文化』第10号  
中村大介 2015「楽浪郡以南における鉄とガラスの流通と技術移転」『物質文化』95号  
中村豊 2012「弥生時代における結晶片岩製石器生産・流通史の復元に関する研究」平成20～23年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)成果報告  
西口陽一 2000「緑色(黒色)片岩製柱状片刃石斧」『あまのともしび』原口先生古稀を祝う集い事務局

- 禰宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 白雲翔 2005 『先秦兩漢鉄器的考古学研究』科学出版社
- 広瀬和雄 1993 「弥生時代首長のイデオロギー形成」『弥生文化博物館研究報告』第2集 大阪府弥生文化博物館
- 釜山大学校博物館 2002 『金海大青遺蹟』
- 松木武彦 1996 「日本列島の国家形成」『国家の形成』三一書房
- 宮里修 2007 「多鈕細文鏡と異形青銅器からみた細形銅剣文化の地域的盛衰」『韓半島の青銅器製作技術と東アジアの古鏡』国立慶州博物館・奈良県立橿原考古学研究所・アジア鑄造技術史学会
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 孫明助 1998 「韓半島中・南部地方の鉄器生産遺跡の現状」『嶺南考古学』22号
- 李健茂 1992a 「韓国式銅剣文化」『韓国の青銅器文化』国立中央博物館・国立光州博物館
- 李健茂 1992b 「韓国青銅儀器の研究」『韓国考古学報』28集
- 李康承 1987 「扶餘九鳳里出土青銅器一括遺物」『三佛金元龍教授停年退任記念論叢』1 一志社
- 李ソクボム 2012 「嶺南地域における粘土帶土器段階の石器様相」『青銅時代石器の編年』韓国青銅学会石器分科ワークショップ
- 李南珪 1982 「南韓初期鉄器文化の一考察」『韓国考古学報』13
- 遼寧省文物考古研究所・鉄嶺市博物館 2012 「遼寧西豊県東溝遺址及墓葬発掘館報」『考古』2011-5
- 遼寧省文物考古研究所・鉄嶺市博物館・西豊県文物管理处 2012 「遼寧西豊県永淳遺址及墓地的発掘」『考古』2011-3
- Karimali E. 2009 *Lithic and metal tools in the Bronze Age Aegean: A parallel relationship, Lithic technology in metal using society*, Aarhus University Press.
- Butler C. 2009 *The demise of flint tool industry, Bronze Age Connections*, Oxbowbooks.
- Ford S. et al 1984 *Flint-working in the metal age, Oxford journal of archaeology*, Volume 3, Issue 2.